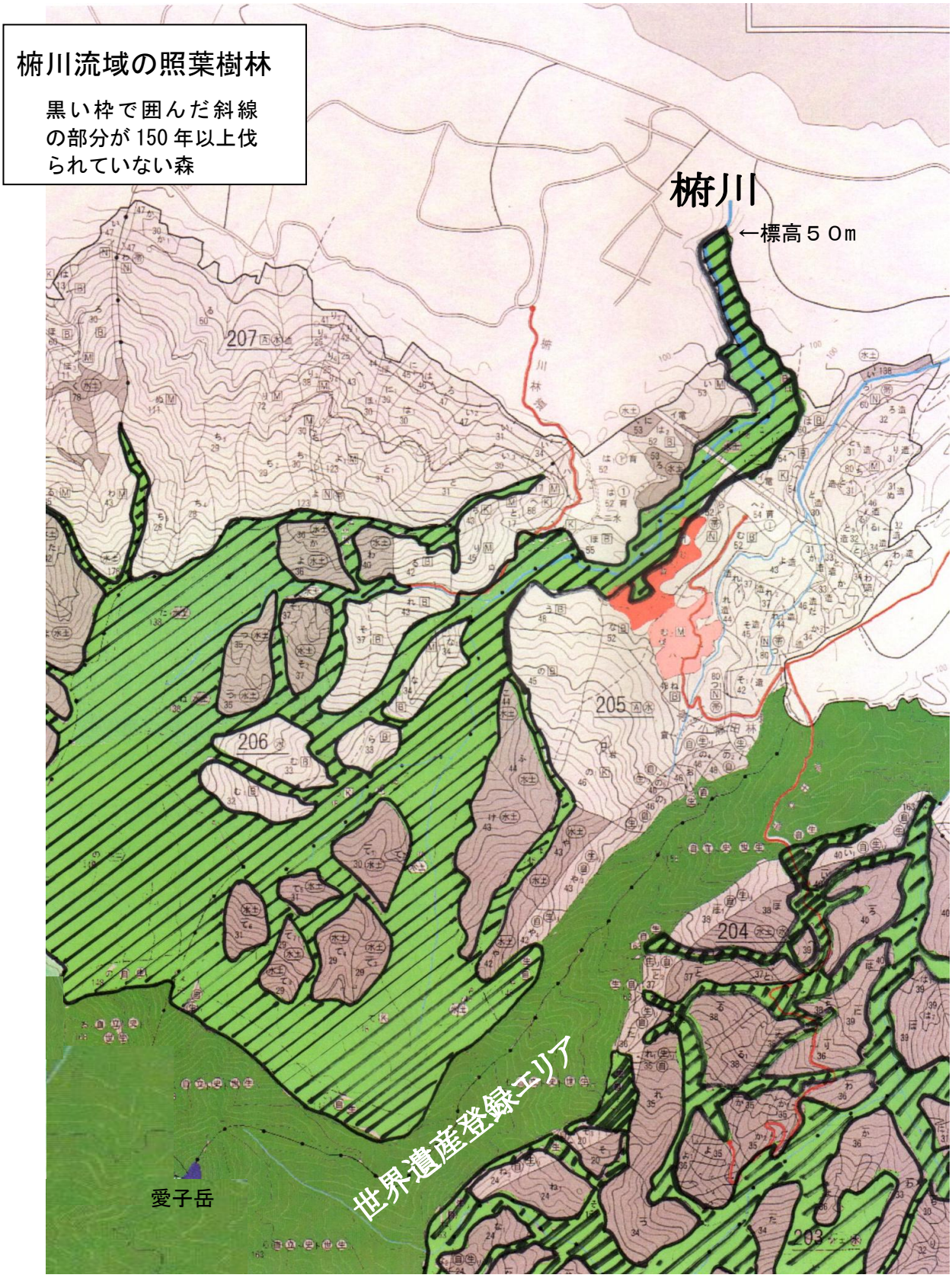
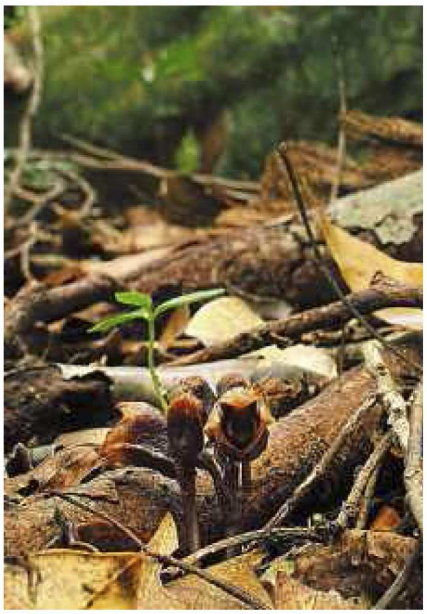

楠川流域の照葉樹林
黒い枠で囲んだ斜線の部分が150年以上伐られていない森
楠川
←標高５０m
207
206
205
204
203
愛子岳
世界遺産登録エリア

屋久島の豊かさ象徴する発見

ヤツシロランの一種、国内初

屋久島の照葉樹林で地元の写真家が撮影した花が、国内で初発見となるヤツシロランの一種だと分かった。屋久島では8年前にも新種の植物が見つかっており、一緒に現地調査をした研究者は「屋久島の原生林の豊かさを象徴する発見だ」とその意義を強調する。



国内で初めて発見された「タブガワヤツシロラン」(手前)＝今年4月、写真家・山下大明さん撮影

ランは、屋久島東部にそびえる愛子岳(1235メートル)のふもと、人里近い低地の原生林の中に約20株、ひっそりと咲いていた。落ち葉の間からのぞく花びらは長さ1センチほど。島で40年来植物を撮り続けてきた屋久島町の写真家、山下大明さん(60)がシャッターを切り、カメラの液晶画面で再生すると、「今までに記録がない花」の姿がそこにあった。

撮影後、希少な植物の調査を続ける末次健司・京大白眉センター特定助教(植物生態学)に写真をメールで送信した。2日後、一緒に現地調査に入って採取。研究室で解剖した結果、台湾でしか見つかっていない種類と判明した。楠川(たぶがわ)地区で発見したことから、山下さんがタブガワヤツシロランと和名を付けた。

ヤツシロランの仲間は、照葉樹林に生息する菌類から養分を取る「菌従属栄養植物」だ。光合成をしないため葉は持たない。屋久島のように高温多湿で菌類が豊富な環境でないと自生は不可能だ。

屋久島の照葉樹林では2007年にも、山下さんが撮影した写真をもとに、九州大学大学院理学研究院の矢原徹一教授(生態学)が新種「ヤクノヒナホシ」を確認した。相次ぐ未知の種の発見について矢原教授は「屋久島低地の照葉樹林、特に渓流に近い湿った林にはまだ未発見の植物が残されていることを明らかにした」と評価する。

ただ、こうした低地の照葉樹林は人里近く、世界遺産地域や国立公園にも指定されていないため、開発の危機に直面している。

タブガワヤツシロランの自生地周辺の森では、治山や林道工事によって伐採が続く。隣接するスギの人工林が皆伐され、森の中に直射日光が差し込むようになり、森の乾燥化が進んでいる。ヤクシカが森に入りやすくなり、食害による被害も広がっている。

矢原教授は、屋久島の照葉樹林の開発について「砂防ダム建設や森林伐採などによって渓流付近の森林環境に大きな影響を与える計画については、アセスメントを実施して、貴重な植物の自生地消失を防ぐ必要がある」と警鐘を鳴らす。

島内で自然保護活動を続ける「屋久島学ソサエティ」の副会長で、今回の現地調査を一緒にした手塚賢至さん(62)は「屋久島の自然の多様性を維持するためには、国立公園法などで保護された高山だけでなく、低地の照葉樹林をしっかり守る必要がある」と訴えている。(屋久島通信員・武田剛)

照葉樹林の保護 研究者ら訴え

スギ林が皆伐された現場を調査する山下大明さん(左)と手塚賢至さん。すぐ隣りの森で「タブガワヤツシロラン」が発見された＝1日、いずれも屋久島町